長洲町立長洲小学校　校長便り　No.１３８

# みんなの居場所

**裏面の話題**

**みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。**

令和５年１１月３０日(木)

## 雑感

先日、嬉しい知らせがあった。

３０代の頃担任させて頂いたお子さんから連絡があり、「命を授かりました。」との知らせだった。最近は、おじいちゃんになったような感覚になる。さすがに名付け親になってほしいとは言われないが、名前が決まると命名札を書いて欲しいと頼まれる。嬉しい限りだ。これも教師冥利ということだろう。

教師という仕事の遣り甲斐は、人と人との繋がりが増えることにあるのではないだろうか。一生懸命やればやるほど、この繋がりは加速度的に増えるように思う。私の場合、卒業を節目に、その後の付き合いの方が長い教え子達が多い。その後の人生の節目節目で相談事が多いからだ。

こんな教え子達に囲まれて私は幸せ者だと思う。今後も教え子達へのアフターサービス?を欠かさないだろう。

## 学校の大切な役割「社会性の育成」①

学習指導要領には、子供達が未来社会を切り拓くために「何ができるようになるか」を目指すものが示されています。また、「主体的・対話的で深い学び」の実現のため「どのように学ぶか」を強く求めています。本校では「主体的・対話的で深い学び」を「主体的・協働的で、深い学び」と捉え、他者との協働的な学び合いを前面に押し出した学習活動を展開しています。

このような授業改革や協働活動の展開によって、我々は今後の学校の在るべき姿を目指して日々歩みを進めているところですが、在るべき学校の姿は授業だけではありません。学校が担う役割は学力充実だけではなく、「ルールの重要性」「思い出づくり」「社会性を育む」等々、数え上げればきりがありません。今日は、この３点目に挙げた「社会性を育む」ことについて述べてみたいと思います。

私はこれまで高学年担任が多く、その中でも６年生の担任が最も多かったです。これは６年生への飛び込みの担任が多かったことを意味しています。私はこの経験により、担任としての仕事、パフォーマンスについての評価は、１年のスパンで行うようにしました。その結果、私は１年間全力投球の癖がつきました。他の先生からは「折角１年間向き合って、子供達との関係も良好だから、２年間受け持ちたい。」という話も聞かれましたが、それは教師側の理由です。私も持ち上がりの担任の経験もしましたが、逆に子供達の立場からは別の教師との出会いが与えられなかったともいう見方もできます。更に、「クラス替え」ということも考えてみましょう。小さな学校ではクラス替えは無く６年間、固定された人間関係のままで卒業を迎えることも多く、多くの同級生との中で育まれる社会性の発達にも、少なからず影響が出ます。私は、飛び入り担任が多かったせいか、毎年クラス替えの方が子供達にも教師にも良いような気がしています。社会性の発達という視点から考えると、多くの人と出会い、その中でどんな人とでも「上手くやっていく」ということを学ぶような気がします。私は、１年しか担任できなかった多くの子供達や保護者と、今でも密な付き合いをしています。

## シリーズ「自分を語る」#138

地震直後の就寝スペースの確保は大変でした。車中泊が続くとエコノミークラス症候群の心配もありますし、両親も元気とは言え、避難生活も持久戦の様相を呈してきましたので、体力の消耗が心配でした。

１６日（土）まで車中泊を余儀なくされましたが、その後は家族が分散して寝るようにしました。ゆっくり横になれる状況下での車中泊と、庭木にブルーシートを張っての青空泊の２つです。小屋は荷物も多く、余震が続いていたために危険と判断、就寝スペースとしては考えられませんでした。車は私が出勤に使うので、起床が早い者だけ車中泊をしました。娘と妻は野外に寝ること自体が心配だったらしく、車中泊で、結局、車中泊は妻、娘、息子２人の４人でした。青空泊は私の両親で、地面にブルーシートを敷き、その上に敷布団、毛布、掛布団、枕をセットします。そして、ブルーシートの真ん中に脚立を置いて中央部を上げて、雨がたまらないようにしました。いわゆる屋根のような状態です。そして、ブルーシートの周りに雨が流れてこないように、溝を掘りました。これで完成です。両親は「面白い！」なんて言いながら、青空泊を楽しんでいました。で、私はどこに寝たのか？　実は、小屋です。小屋のディレクターズチェアに座って寝ました。凄いでしょ？　よく体がもったなと思います。この時の私は漠然とした不安の真っ只中にあって、何をしていても仕事、家族、今後の生活…、あらゆるものへの漠然とした不安に苛まれ、答えが見いだせる訳もなく、考えても同じなのにずっと考え続けていました。結果、酒を飲んだとしても十分眠れることはありませんでした。当時はとにかく家族に心配をかけてはいけない、心身共に「動き」を止めないようにしていたようです。

小屋でボンヤリした時間を過ごしながら、本当は母屋に戻れば停電もないのでテレビも見ることができます。でも、家族が外で寝ているのにそんなことをする気力さえありませんでした。本でも読めばよかったのかもしれませんが、とにかく気力が無いのです、何をするにも。辛い時間でした。こんな感じで、１日の私は抜け殻のような状態でした。

１７曜日、地震後の朝のことです。私の父の実家は益城町です。そうです、震源地の町です。居ても立ってもいられなかったのでしょう、父は愛車スーパーカブ号で益城町をパトロールに出かけました。おまけに母の実家は西原村です。震源地に近く、被害も大きかった村です。そこへも出かけたようでした。両町（村）共に、ひどい状況だったらしく、「うちが片付いたら手伝いに行かにゃんいかんなぁ。」と呟いていました。私も１８日を中心に手伝いに行きました。ほんと、この頃は休みが全くありませんでした。

１８曜日、母屋の使い勝手を良くするために、生活を便利にするために、妻と作業を開始しました。先ず、余震が続いているため、避難がしやすいように下履きのまま母屋に入れるようにしました。段ボールと時期的に使わない布団、バスタオルなどを廊下に敷きました。居間は片付けをしながら余震があれば飛んで外に出ました。その繰り返しです。次に、調理器具の中で、ストーブで使える物や普段使いのコップを外に持ち出しました。母屋で使う物や場所は冷蔵庫、洗濯機、トイレ、台所くらいでしょうか。どうしようもなかったのは、風呂が使えなかったことです。何故か？　ガス漏れの確認作業が終わるまで供給が絶たれているからなのです。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）